



TITLE:

遼代壁畫古墳

AUTHOR(S):

山本, 守

CITATION:

山本, 守. 遼代壁畫古墳. 東洋史研究 1937, 2(5): 438-438

ISSUE DATE:

1937-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138759>

RIGHT:

遼代壁畫古墳

昭和十二年三月初旬、國立博物館は遼陽附近に於いて、壁畫ある一古墳の發見せられた旨の通知に接したるを以て、同十三日私は黒田博士の御伴して遼陽に向つたが時未だ寒冷の候であつたので、一應の調査と撮影のみに止め、降つて四月廿九日再び同地に向ひ、黒田博士と共に附近農家に住み込んで、調査に従事すること十日、略調査を完了した。今概略を述べるに、

一、所在 本古墳は遼陽の東方三十馮里、弓張嶺行き鐵道に沿つた石砦子屯内なる同名の山の東南斜面の畑中にある。二、構造 二、四〇米乃至二、六〇米の略圓形をなす一室である。底は磚を以て敷きつめ、側壁下部は切石又は磚にて積み上げ、高さ約一、二〇米上部は穹窿狀にして、磚を用ひて、持ち送り式に築き頂上に於て直徑約七〇厘米の穴を残し、蔽ふに平石を以つてす。穹窿の高さ

約一、二五米磚の重りは二十一枚、美道は正東南に向ひ、磚を以て築き入口は平石にて密閉す。内部正面には平石を以て組立てた石棺あり石は倒れて原狀は存せずその内に木棺を置いてあつたものらしく、更に向つて右側の壁に沿つて、刳拔の石棺一箇を置く。三、壁畫 壁畫は石壁の



上に土及び漆喰を塗り、その上に毛筆を以て強く太く墨線を畫き、唇、襟裝飾等には朱を用ひ又衣服は綠或は褐色にて加彩して居る。畫題は正面に張幕かと思はれる四面の風景畫を畫き、その右には祭器(?)か樂器(?)を持てる男女各一人の立姿ありその次に五人の樂手が樂を奏せる圖

を描く。左側も同様に、祭器か樂器を持てる男女各一人の侍立せるものがあり次に五人の樂人を描いてある。更に美道には入口警護の姿をしたる各々二人の人物―都合九人宛十八人を畫く。四、副喪品 室内に於いて黑色土器の細片を見出した他、何物も得ず、又刳拔石棺の蓋はすでに開かれて居り、これ又骨片の他何物もなく、只正面の石棺中から布切れ花紋ある鍍金金屬の細片等を見出し得たに過ぎない。抑この古墳は、屯民の言に據れば、民國十八年既に地主によつて發見され、その節内部より破碗等取り出した事があるそうであるから、副喪品もその時既に持出されたのであらう。この古墳の年代推定に關しては、墓の形式、或は圖中人物の服裝よりして、遼代のものと考え得るが更に使用せる磚が、遼代特有の線條を有することからしても斷定出來よう。

尙詳細は近く發表される、黒田博士の報告に就いて見られたい。

(山本守)